

ヨーロッパ歳時記と平安朝の年中行事

山中裕

はじめに

植田重雄氏の『ヨーロッパ歳時記』（岩波新書（黄版）二四五、一九八三年）という本がある。大変な名著である。新書本だが、まことに充実した書物で、ヨーロッパの年中行事の実態がまことにたくみにまとめられている。

その序文ではまず、「聖マルチン祭」から論を始める。「キリストの復活とともに万物は一切の冬の桎梏から解放され、生命がよみがえる」とし、「このようにヨーロッパでは冬季と夏季、あるいはクリスマス期と復活期の二つの生活形態の劇的な交代劇で考えることができる」とする。そして「日本人自身の眼で見、感受したヨーロッパの自然や歴史、生活の暦があつてよい。歳時は文化的原点であり、人間の存在の基層、意識の深層によるものである」と言われる。私は本書を読んで、その歳時記が、日本のそれと大変類似することを強く感じたが、理由はまさにここにあるのであろう。そこで私は、本書の紹介を兼ねつつ、日本の歳時記とヨーロッパの歳時記との比較検討を行つてみたいと思う。ヨーロッパは太陽暦にもとづく教会暦が中心となるが、やはり民間暦・農民暦もあ

るという。ここに私は日本の歳時記・年中行事と本質的に共通のものを見出すことができると思うのである。

そこで早速、我が国の正月の行事に目を向けてみよう。正月というのは、我が国の民俗学では、目に見えぬ神の出現の場とみなしている。

例えば日本の昭和初期の童謡にも、

とろりとろとおねんねよ

子どもの待つてるお正月

お鈴の櫓にのせられて

チリチリチリンもう来ます

とあつて、やはり正月は神のお出でに始まるのである。この童謡も大晦日夜の、子供たちのお正月を楽しみに待つ気持ちがいじみと表れている。私も幼き頃のお正月を待つ楽しい思い出がよみがえってくる。日本では古代からすでに、正月を待つ風習が多くあり、平安時代に入ると年中行事として儀式となつて定着する。すなわち正月元日は盛大な儀式で始まっている。まず寅の刻（午前四時頃）に四方拝があり、つづいて辰の刻に朝賀（朝拝ともいう）となる。これは即位式にも準ずるようなもので、天皇が大極殿に出御される盛大な儀式である。午前中の行事はこ

こで終わり、午後は元日節会（元日宴会）となり、天皇が紫宸殿に出御。ここではまず儀式に先立って御曆奏・氷様奏・腹赤奏がある。御曆奏では、いうまでもなく、今年の曆（具注曆）を奏上する。氷様奏は、氷の厚いことを豊年のしるしであるとみて、氷の厚さ薄さの寸法を測って奏上するもの。腹赤奏とは腹の赤い魚を献上することをいうが、その魚は鱒であるとも言われている。これは初春の慶賀の意を表する主旨から山海の珍品を献上するという風習が、いつしか恒例の行事となったもの。こうした行事のなかには民間行事を宮廷で採用したものがある。こうした行事はやはり農事曆によるものである。

一方、植田氏が、

ゲルマンの名ある神々や山や森、水の精霊はキリスト教の守護聖者に吸収されていったのである。キリスト教によって、古いゲルマンの神々や精霊は異端として否定された。しかし民間信仰においては、形態を変えながら生きのびたものもある。

と言われるように、民間信仰という面からも、ヨーロッパの行事と日本の行事の共通点が多い。例えば、正月二日から四日に行われる二宮大饗（中宮と東宮の大饗）と大臣大饗があるが、その大饗には尊者という者が必要である。尊者とは、この日、大臣家を訪れる第一の正客のことで、これは神の到来にあたる。すなわちお客様として非常に尊ばれ、迎えられる。大臣家側も、門のところまで主人の大臣が出迎えられ、手を引いて家の中へ招待する。大臣家へ尊者として親王が来られる場合もあり、これまた神の象徴である。

また先述したように我が国では元日に御曆奏があるが、これは植田氏

の言われる、「本来、曆は人間の意識を離れて存在しない（中略）大自然と人間の生活のリズムとしての民間習俗がそこにある。」という観点と合致し、日本の元日の御曆奏もこのことから説明できる。かように洋の東西を問わず歳時記に共通点を見出せることは実に興味深いのである。そこで早速本論に入ることとする。

一 白馬に乗った聖者―冬のはじまり―

聖マルチン祭ともいい行列の真中あたりに大きな張りぼての鷲鳥を台座に乗せて少年たちがかついでゆき、そのあとに少年少女の提燈がつづく。雪の中でゆれる提燈の光が幻想的である。こんなにも美しい祭があつたのかと、そのときしみじみ感じたものであつた。

とあり、

これは子供たちが聖マルチンを迎えに行く行事で、やがて町の城門、村の入口などに進んでゆくと、白馬に乗った聖マルチンが従者を従えて待っている。子供たちは歓呼の声をあげ提燈を振って聖者を迎え、大きな行列となつて教会へと行進をはじめめる。

とある。これはまさしく我が国の白馬節会（あおうま）に合致する。ヨーロッパの方は十一月十一日で、秋の収穫を終え、冬の生活に入る初めの日であり、クリスマススの準備に入る時期であるという。我が国の正月七日の白馬節会（あおうま）は春の行事であるが、新しい季節に向かって白馬を牽くという点が類似する。そして白馬節会は、いうまでもなく、左右馬寮の役人たちが二十一匹の馬を用意し、天皇の豊楽院または紫宸殿への出御の下に、公卿

たちが、馬の、紫宸殿の南庭より清涼殿の東庭に渡っていくところを見るというものである。これには「年中の邪気を避く」という意味があり、いわゆる祓の思想であると同時に、春を迎えるという新鮮な気持ちの表れでもある。植田氏は、「マルチンは恵みを施す存在として、冬の自然の猛威のなかにあつて愛の光をともしようとするのである」とされるが、まさにこれは白馬節会の本質でもあつて、それを覽るという思想が共通するのである。

収穫を終え、聖マルチン祭をもつて冬を迎えるにあたり、十一月三十日は、グレゴリオ暦以前では大晦日であつた。それ故、現行の暦になつて十二月三十一日の大晦日に、次の年の豊凶の占い、人間の運勢などの予想が行われる。

という。この大晦日の行事の豊凶の占いというのは、先述した元日の氷様奏と相通じるところがあり、また我が国の大晦日の行事である追儺のなかにも、これに類似するものを見出すことができるが、大晦日の行事については後に述べることにしたい。

二 クリスマスがやってくる―冬至の習俗―

冬の厳しい寒さのなかで、冬至の新しい誕生を祝い、古代のローマ人もゲルマン人も常緑樹の枝を森から切つて家の入り口や部屋に飾りつけた。五月祭や復活祭など祭ごとに白樺などの若葉の枝を挿して飾るのは、病いや災いを防ぎ、新しい太陽から健やかな生命力を迎えるためである。

と言われ、「これは神の宿る木としてクリスマスツリーにも通じる」という。

このような習俗、すなわち「木をたたくことは豊饒のデーモンをよびさます」と古くから言い伝えられているといい、日本でも「成木責め」の習俗が正月に行われると植田氏は言われる。そして「そこに鉈目をつけ、お粥を少々つける。それをする、その年は稔りがよい」とすでに植田氏が指摘している。そしてさらに正月七日の七種粥、また十五日の小豆粥などは、これに通じるところがあると言われるのである。

『枕草子』に、正月十五日の午後、粥を煮る燃料であつた薪の燃え残つた木を、女房たちが手に持つて女房たちの尻を打つという風習がみえる。これを粥杖かゆづえと称し、これで打たれると子どもが生まれる、懷妊するという風習が日本の平安朝に存したことは明確であるが、これもまたヨーロッパの行事に通じるところがある。

またこれは日本の成木責めとともに、正月の聖なる神を迎えることに通じるものに、門松がある。正月の初の子の日に、紫野や嵯峨野へ遊びに出かけ、若菜を摘み、小松を牽くという行事があつた。また正月七日には「供ぐう若菜」という儀式行事があり、これは朝廷・民間共に行われていたことが明らかであるが、これが現在の七草粥（平安時代には七種粥）である。さらに平安朝では小松のことを若菜と称する場合もあった。門松は神が宿るといふ、神のよりしろであると平安時代からいわれている。

つづいて大晦日から正月の行事を見ていこう。『ヨーロッパ歳時記』によると、「燂くわし夜」といって、十二月二十五日から一月六日まで、新

しい出発点において潔めをおこなう宗教的行事があるという。「燻し夜」とは、山野で採集できる蓬など薬草となるものを燻して、悪い虫、デーモンや災いを追い払う古い習俗で、それが冬至の祭の頃にあったという。これも潔め、いわゆる祓の思想であり、我が国の追儺の儀に合致する所が多い。追儺では大舍人寮の役人が鬼を追う役をつとめる。その男は方相氏といわれ、仮面をかぶり、桃の弓杖と葦の矢を持つて目に見えぬ鬼を追つてゆく。その後八人のかわいい童が声を挙げながらつづいてゆく。平安末期には、この方相氏があまりに恐ろしい姿をしているため、これが鬼のように思われ、方相氏を追うというようなことにもなった。その後についてゆく童は、鬼を追うために「ふりづゝみ」というものを持ちながら体をゆすつて歩いてゆく。『栄花物語』（巻二）には、

はかなく年も暮れぬれば、今の上、童におはしませば、晦の追儺に殿上人、ふりづゝみなどして参らせたれば、ふり興ぜさせ給ふもをかし。

などとあるのもおもしろい。この童は「ふりこ仮子」と呼ばれた（本文末の図参照）。『徒然草』に、

公事どもしげく、春のいそぎにとり重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拝につゞくこそおもしろけれ。晦日の夜いたう暗きに松どもとして夜半すぎるまで、人の門たゝき走りありきて、何事にかあらん。ことごとくしげくのゝしりて、足を空にまどふが、暁方よりさすがに音なくなりぬるこそ年のなごりも心細けれとある。

また植田氏は、「ゲルマンの民間信仰によれば、この燻し十二夜のこ

ろ、すなわち冬至のころに生れ故郷のわが家に死者の霊や祖先の霊が帰つてくるといい伝え、とくに火を焚き、蝋燭をともし、その訪れを待つ」という風習があるという。これについては類似のものが平安時代の多くの文献に残っており、例えば『蜻蛉日記』『小右記』等に見える。

『小右記』長保元年十二月廿九日条には「御魂、今年於「染殿」奉拜」、寛仁元年十二月卅日条には「入夜解除。奉「幣諸神」。次拜「御魂」。皆是例事也。亥刻追儺」などあり、『枕草子』にも、

ゆづり葉のいみじうふさやかにつやめき、茎はいとあかくきらきらしく見えたるこそ、あやしけれど、なべての月には見えぬ者の師走のつごもりのみ時めきて、亡き人のくひものに敷く物にやはれなるに、

などとある。また『和泉式部集』に、

なき人のくる夜ときけど君もなし 我が住む里や玉なきの里

などと夫（敦道親王）を偲ぶ和歌がある。また『明月記』や『徒然草』に、宵より門火を焚いて招魂するとか、提灯を並べて明るく灯をともして迎えるなどもみられる。既に植田氏は『徒然草』の例、

亡き人のくる夜とて玉まつるわざは、この比都にはなきを、東のかたにはなほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

を挙げておられる。そして全体的に見るとき、この燻し十二夜の本来の姿は、古い年を終え、新しい年を迎える大切な「慎み」の時期であるという。「慎み」の時期とは、すなわち、氏のいわれる先述の悪い虫、デーモンや災いを追う古い習俗であって、それがこの頃あったとするのである。

三 ペテロ様のお国入り―冬の転換―

二月（フェブルアール）はラテン語の「潔め」に由来する語で「潔め」の月。現在の十二月にあたる一年最後の月である。「潔め」の月にふさわしく蠟燭の「潔め」の祭から始まる。二月二日のそれを「マリヤの光のミサ」とよんでいる。この日はクリスマスから四十日目にあたり、冬の季節の終りと、同時に春に歩み出す先駆的な行事となるという。そしてその後の日曜日には、この年の豊饒と祝福を願って、太鼓を鳴らし笛を吹いて子供たちが村を行進する、やはり春へ向かつての予祝の行事があるという。この春に向かつての子供たちの行進というのも、先に述べた我が国の平安朝の追儺の童たち、すなわち「みどりこ飯子」の行進に類似する。植田氏は、地方によっては二月二十二日のペテロの日をもって春のはじめとするところがあるといわれ、またこのペテロの日の頃は呪術的な虫の追出しを行うところがあるともいわれる。「子供たちが木槌を持って農作物に害をする蝶とかいも虫を追出す所作をする」とあるが、これは我が国の踏歌の節会（正月十四日の男踏歌、十六日の女踏歌）に合致するところがある。

さてこの我が国の正月十四日の男踏歌。これは十四日の夜、夜通し行われる。男踏歌は「春になり農耕が始まるに際し、豊穰を祈る祝儀で」虫を退治することがその本質である。儀式としては清涼殿東庭で行われ、天皇も御出し、庭中を周旋すること三度、御前に進んで祝詞を奏し、歌曲を奏する。天皇の御前で舞踏するが、これは地面から出て農耕を邪魔

する虫を退治するためのものである。その後、日暮とともに舞踏人たちは京の街へ進出し、満月を賞でながら内裏を出て、上皇・后の所、あるいは貴族の邸で踏歌をする。貴族の邸では踏歌の人々に湯漬けなどをこ馳走する。その踏歌の人々の休息するところを水駅みづえきという。『源氏物語』の初音・真木柱・竹河の三巻に詳細にみえ、初音の巻では源氏の邸六條院が水駅となる。源氏は踏歌の人々に盛大なもてなしをする。しかしこの儀は平安の初期、円融天皇の天元六年（九八三）で終わってしまう（『小記目録』）。この儀は満月をたよりに夜を徹して行い、早朝に内裏に戻ってくる。天皇は早朝再び出御され、踏歌の人々は天皇に挨拶をして解散する。これは中国渡来の行事であるが、あまりにも大げさで十四日夜の徹夜などというのは、十五日の儀式にも影響することなどから、平安前期に絶えてしまったのである。そしてその後、女踏歌は正月十六日に行われており、これは昼の行事で、内教坊の舞妓が四十人、清涼殿の前庭で舞踏するものである。女踏歌は江戸のはじめまで行われていたようである。

このように、春に先立って農耕に害する虫を、舞踏によって地面を踏み込んで退治するという、ことの本質がヨーロッパと日本とで類似するのである。

すでに円融天皇時代に停止になっている男踏歌の儀が、四、五十年後の一條天皇時代に成立した『源氏物語』に詳細に叙述されているのは興味深い。紫式部が、ヴァラエティに富んだ、今も行われていないこの行事を利用したのは、文学的效果を挙げたいがためであつたのであろう。その当時行われていた女踏歌を用いず、すでにその当時、停止になって

いる男踏歌を用いたのは、物語の材料として男踏歌がふさわしい行事である」とみただからである。

四 愚者たちの踊り―冬の終わり―

つづいて植田氏は、謝肉祭前後として、「長い冬が明けて春（夏）を迎えるまでにはじつにさまざまの祭や行事がある。その主要なものは四旬節とか、謝肉祭とかよんでいる祭である」と言われ、この祭には道化の仮面をつける風習があると言う。この連中を「愚者連」と称するが、

「愚者連の組は仮面をつけ、異様な服装で身をつつみ」とある。これも現在の我が国の節分、また平安朝の追儺の儀式に類似する点をみつけることができる。すなわち追儺の夜、天皇が紫宸殿に出御され、中務省が大舎人寮の役人を連れていつて、体の長大な者が方相氏となつて仮面をかぶり、右手と左手に戈と楯を持って鬼を追う。つまりこの仮面をかぶった方相氏による行事は、我が国でも冬を追い春を迎える行事であつて、方相氏の姿という行事の内容といい、仮面をつけるという所まで実にヨーロッパとよく共通しているのである。東北地方で行われている「なまはげ」もこれに類似するものと言えよう。

五 よみがえる太陽―春の祭―

復活祭に先立つ「嘆きの週」のなかで最初にくるのが「棕櫚の日曜日」、そして最後の晩餐にあたるのが「緑の木曜日」である。「農村の人

びにとつて、パルムを立てないと復活祭を迎える気分にならない」とあり、また「緑の木曜日」には「野原に出て新しく萌え出た野草を摘む習慣がある」という。ここですでに植田氏が「日本の若菜摘み、七くさ粥とも相通する」と言われているが、まさにその通りであり、また我が国の「端午の節会」にも共通するのである。現在の五月五日の端午の節句は、鯉のぼりや武者人形が主になっているが、もちろんそれらは平安時代にはなかった。元来の日本の五月五日の端午の節会は、古く「六国史」には「薬獵」と見えていて、野原に出て薬草を摘む日であつた。その風習が菖蒲を飾り、また菖蒲で御殿や家々の柱や屋根まで葺くということになつていくのである。五月五日の薬玉も我が国は薬草で作る。

平安朝の五月五日の楽しさは、清少納言が『枕草子』に詳細に記している。清少納言は五月がよほど好きであつたらしい。

さてついで復活祭。『復活祭の火』を教会や修道院から蝋燭にもらつてきた農家は、家中の一切の古い火を消して、新しく祭壇やかまどに火をともし」とあるが、これは我が国で正月十五日に行われた「御薪献上」にあたるものである。「御薪」とは御竈木の意味で、正月の神聖な火を作るための燃料である。すなわち国司たちが宮廷で使用する薪を宮内省に献上する儀式である。

さらに火とならんで水である。「復活祭の水」ともよばれ、「復活祭の朝まだ太陽が昇らぬ前に（中略）とくに東の方に向つて汲むとよい」という。これも植田氏がすでに「日本の正月の若水汲みと想い合せると興味ある問題となろう」と言われるとおりである。我が国の若水は、すでに『延喜式』主水司に見えている。

六 美しい五月よ——夏のよみがえり——

「ヨーロッパ人の五月にたいする手放しの讚美と陶醉は、長い間のきびしい冬の存在を前提にして考えねばならぬ」と言われるが、我が国でも、先述したように、五月の春の訪れと緑の季節の喜びはまことに大きい。

さらにヨーロッパでは、美しい五月を迎えるにあたり「五月柱」を立てるといふ。「五月一日以前に山や森にはいつて五月柱にふさわしい樅や唐檜などを選び、柱頭だけ緑をのこし、あとは枝払いをし、聖ゲオルクの日の四月二十三日の夜中に荷馬車で引いてきて、日の出前にかけて声をかけて立てるのは、男たちの心意気を示すものであらう」といふ。そして「五月柱には樅の葉で編んだ輪をつり下げ、紅白青黄の布をたらし、人形やパンなどもつるす」とあるが、これこそ葉草で作る我が国平安朝の五月五日の儀式に用いる葉玉である。

七 大地の守護者——夏至の習俗——

ヨハネの夏至の祭のころ、人間に味方する良いデーモンは、牧草を肥えさせ、葉草の効力をつけさせ、牛や山羊の乳を豊かに出させるとあり、ここにも葉草の効力が現れている。そしてやがて収穫の祝いに入る。

八 収穫のよろこび——夏の終り——

「一年間を通じて見てみると、収穫の豊饒祈願の祭と、収穫を得た感謝の祭と二つに分けて考えられる」が、収穫祭はもちろん後者である。十一月一日の万聖節には「収穫を祝い、太陽神に感謝し、神に収穫物を捧げてさまたまの御馳走を楽しくいただく祭であつた」といふ。これは我が国の十一月の新嘗祭である。収穫を喜び神に感謝し、五節の舞姫が出る華やかな行事であり、これをとよあかりのせちえ豊明節会とよあかりのせちえというのも、読んで字のごとくであり、まさにヨーロッパの収穫祭に相当するとみてよい。

あとがき

本書最後の「あとがき」で植田氏は次のように言われる。

現在の日本人は個々人に解体されてしまったようなところがあり、しかも急速な現代化、先進化がすすんでいる。その中で元の日本の姿、人間のあり方は何であるかを無意識に摸索しようとしているのではないだろうか。

これに比べると、ヨーロッパの歳時と民間習俗はより硬質であり、情趣的なものは少ないかもしれないが、民間習俗とともに教会暦が厳存していて、その祭やミサを中心にして生活のリズムが動いている。

と。この点、外国の歳時記と日本の歳時記は、現在とはちがくとして、

平安朝のころの年中行事と比較検討してみると、やはり思いがけなく共通点があり、それは植田氏が右に言われるように、祭（キリスト教・仏教・神道をはじめその他）を中心に生活のリズムが動いているからなのである。

植田氏は続けて、「それにしても、歳時（民間習俗）とは何であろうか」と言われ、

新しい季節の生活にはいるために、心を潔め、身を潔め、家や家畜や生活の一切を改めることを人間はやってきた。直接生活を合理化し便利にするものではないかもしれないが、人間の情念を満たす大切に必要な祭としておこなってきた。祭には祈りがあり、讃歌があり、歌や踊りがあり、それはさまざまの芸術や文学を生み出す要素である。

とまとめておられるところは、日本の歳時記においてもまったく同じと言えよう。即ち日本の春夏秋冬の行事も、いずれも「邪気を避ける」という意味・本質から発生しており、その根底にはいわゆる祓の思想がある。そして古代から祭とともに行事はあり、その行事は、はじめは素朴な宴をおこなうにすぎなかったのであるが、平安朝にはいると節会というもつと大きな国家的行事として完成する。それら節会となったものは、元日・白馬・踏歌・端午・相撲・重陽・豊明（新嘗祭・大嘗祭）のみであつたが、その他は宴として、数多くの行事が成立・完成し、中世・近世を経て、今日に至っているのである。『ヨーロッパ歳時記』と比較検討し、これらの行事が、我が国の行事と本質的に合致することを発見した。いまここに、日本の行事の本質と人間の生活の中に存する行事をよ

く検討し、ヨーロッパの歳時記と比較しながら、日本の行事のあり方、日本の歳時記の研究を、過去の歴史をふりかえりながら、本来の日本の姿とともに、今後ますます大いに新しく進めていかねばならぬと私は考慮するところである。

（やまなか・ゆたか 元東京大学史料編纂所教授）



『政事要略』巻29 年中行事12月下・追儺 より
（新訂増補国史大系・吉川弘文館刊）